

漢法苞徳塾資料	No. 018
区分	内経原稿
タイトル	温病正宗について 脈論部分訓読の背景
著者	八木素萌
作成日	1991.03.15

## 1. 契機となった臨床経験

昨年の夏期合同合宿の後の苞徳塾月例会の時のことであったが、「合宿の帰りに風邪を引いたのか1週間寝込んだ、起きたが治らないまゝで、微熱が続き夕方になると熱が高くなる、「丘墟」が冷えて不快だったので灸を据えたが、その後かえって熱が高く出るようになった、何故なのか判からない、熱が高いときには呼吸も速くなっていたのに、脈は数脈にならず緊脈でもなく浮いてはいてもハッキリ浮脈とは言いにくいほどで、むしろ [べたついている] 脈であった、これも何故だか判からない。お灸の後に「五枢」穴・「帯脈」穴の辺りが発赤してそのまゝなもの、どういう事が判からない。」と言う質問が当の本人から出された。

如何にも無理を押し付けて塾に出席したと判かる有様である。月例会は早速に予定変更してこの問題の検討と、本人をモデルに治療する臨床研究に切り替えた。この太田さんの疑問は「『温病論』に言う [伏暑感冒] であって [湿熱] の病証である」と言うことで氷解し、治療は『瀉火補水』法で行なった、結果も良く病は回復した。

この時みんなで脈診したのであるが、[左関<右関] となっていたので、「どう考えても明らかに外感病なのに、どうしてこうなるのか？」という問題が出される事になった。この小論は臨床検討が目的ではないので詳細は略したが、この問題は、私が『温病学』を少しは研究し、温病の鍼治療の問題を考え続けて来ていたので、うまく処理できたのだと思う。

このような出来事があったので『温病正宗』の脈論部分の訓読をやって資料としておこうと思わせた。

## 2. 『温病正宗』の構成と著者など

初めには序文も出版説明も見ないで、本文を通観して「これは大変な本のような」「どうも清末から民国にいたる時期の現代中医学の土台が築かれた時期の重要な著作のような」と思って購入して読んでいた。著者はどういう人で何時著作されたのか？と質問されて、当初に承けた印象を答えとしたのだが、恥ずかしい次第である。あらためてこの本の成立年代と著者について序文や出版説明を調べ直した次第である。

著者は「王徳宣」字は「松如」、「恬憺山人」と号す。民国15年には八軍25団の軍医将校であった。民国21年に猩紅熱が大流行した折、高い治療業績により名声を博した。湖南国医専科学校で教授として1935年以来『温病学』(民国24年の春)を教授した。「秦伯未」と並び現代中

医学の土台を築いた人の様で現在の消息は不明、湖南国医専科学校の後を継いだ中医学院に問い合わせれば恐らく正確な事が判明しようが、亡くなられていると思われる。

『温病正宗』は1935年に撰され、1936年に初版が刊行されたが、再版されなかった模様である。50年後に「首都図書館」（北京国立図書館？）に所蔵されていたものを、「李劉坤」の手による点校を経て、1987年10月に第1版が「中医古籍出版社」から発行されている。

自序に「…孔子為政 必先正名者 名不正 則言不順 事不成也 医学操人生殺之權 豈可不正其名乎 吾国医学 所以異夫欧西者 我重氣化 而彼重形質 彼炫科学 而我求哲理也 惟其重氣化 而求哲理 故不尽可以言伝 而必須以意会 其可言伝者 固易知易能 而須意会者 則難知難能…」とあって、温病を論じる種々の書から「温病」概念の問題と関連して『温病学』を正すという問題意識で著述したものである事が判かる。

『温病正宗』の内容は、上篇では、

- 第1章 温病解釈之正誤
- 第2章 温病真理之探源
- 第3章 温病温疫之辨析
- 第4章 温病学説之折衷

となり、下篇では

- 第1章 通論、此处では「温病学」成立までの歴代の古典籍の主要なものの「温」論を通観して研究する。
- 第2章 分論、この章では『温病学』の諸家の27家の論を詳細に研究する。
- 第3章 辨脈、2月10日に発表した温病の脈論である。
- 第4章 分症、此处で主として著者の論が展開される。
  - 1・春温、2・風温、3・熱病、4・暑病、
  - 5・伏暑、6・湿温、7・燥病、8・冬温、

これに附方があり、22種の治法とそれぞれの薬方、他に9種の薬方で、合計31種の薬方が記述されている。

### 3. 『温病正宗』を読み終えて

『温病学』が代表的な複数の人々によって成立し、それぞれによる重要な著書があり、「温病論」の基本的成立の後も「温病」派と「傷寒学派」の長期間の論争があり、「温病論者」の間の論争もあり、「中西折衷学派」との論争もあり、それらの全体が明清医学史研究の検討課題であろうと思う。『温病学』完成の指標を為しているのがこの書であると得心した。